

寺山修司が詠んだ果実や魚

斉藤 倫子

愛読している寺山修司の短歌に、注目している作品がある。それは、「玉葱」「にんじん」「鯖」「桃」「レモン」などの食物が詠み込まれた歌だ。料理をしたり、食事をしたりとという現実的な事は作品内容として詠まれておらず、食物に直結するはずの、台所や健康や生活といったイメージは、どの作品でも希薄だ。それにもかかわらず、多く詠まれている食べ物や飲み物。その存在が気になってしかたがない。

そこで、『寺山修司全歌集』から、食物の存在が印象的な秀歌の多い『初期歌篇』『空には本』『血と麦』をあらためて鑑賞してみたい。始めに『初期歌篇』を読む。

吊されて玉葱芽ぐむ納屋ふかくツルゲエネ
フをはじめて読みき 『初期歌篇』

秋菜漬ける母のうしろの暗がりハイネ売
りきし手を垂れており

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲
はかくまでにがし

青空と同じ秤で量るゆえ希望はわかしそら
豆よりも

たそがれの空は希望のいれものぞ外套とび

スケットを投げあげて

半島語すこし吃れる君のため焙られながら

反りゆく鱈よ

一首目。読書中の心の揺れや、密かなときめきを象徴する、「吊されて芽ぐむ玉葱」が印象的だ。薄暗い納屋の奥にうづくまって本を読む少年と、「吊されて芽ぐむ玉葱」が、遠近法を用いた絵画を想わせる歌である。

二首目。「秋菜漬ける母」の姿がまず見え、次に「暗がり」が背景にあると知り、さらに暗がりの中に垂れている「手」がクローズアップされて見える。手前から奥へと撮影された動画のようだ。

三首目。独特のくすんだトーンが心地よい津軽訛りと、良い香りと風味が特徴である「モカ珈琲」。そのどこか似ている風味を味わっている時間である。友の共通語の明るさが、津軽訛りのくすんだトーンを濃く感じさせ、それが珈琲の苦みとなり、苦みには、友に感じる違和感や寂しさも加わっている。珈琲を飲んでいる数秒間の沈黙が、映画のワンシーンのように見えてくる。

四首目。「青空」の青色と爽やかさ、そして「そら豆」の

緑色と新鮮さが、「希望はわかし」を具現化している。希望の色は青系にちがいないと思える。青から緑のグラデーショ
ンが想像のなかにひろがり、みずみずしい歌。

五首目。たそがれ色の空に投げ上げられた「外套とビスケ
ット」の絵が見える。古い海外映画のポスターのイメージだ。
六首目。「鱈」は、話している間の「君」の代わりに注目
され、君を庇うものとして時間をかけて姿を変える。その存
在感と下の句の描写には、場の雰囲気と作者の思いが反映さ
れていて深みがある。

以上の六首に詠み込まれている、「玉葱」「秋菜」「モカ珈
琲」「そら豆」「ビスケット」「鱈」は、歌の中の物語や風景
のモチーフとして存在する。一首ごとに、静物画を見るよう
に、映画のワンシーンを見るように、ある画像が読者の心に
浮かぶ。その画像には、食物が印象深いモチーフとしてあり、
歌に、色彩や質感や匂いなどの、五感で感じる魅力を与えて
いる。

次に『空には本』を讀んでみよう。

桃うかぶ暗き桶水替うるときの還らぬ父に
つながる想い

『空には本』

いますぐに愛欲しおりにんじんとわれの脛
毛を北風吹けば

包みくれし古き戦争映画のビラにあまりて

鯖の頭が青し

鯖一尾さかさに提げて帰りゆく教師をしず

かなる窓が待つ

わが内の少年かえらざる夜を秋菜煮ており
頬をよごして

復員服の飴屋が通る頃ならんふくらみなが

ら豆煮えはじむ

一首目。「還らぬ父」につながる、説明し難い想いを上の
句が表現している。「暗き桶水」を傾けて水を捨て、また水
を満たす。傷つきやすいデリケートな果実の桃は、その水と
ともに流されそうになる寸前で流されない。「桃」は揺らぎ
続ける想いだ。

二首目。北風が吹いて愛が欲しい、という平凡な感傷の源
に、「にんじんとわれの脛毛」があることで、野趣のある独
自のロマンが生まれている。「にんじん」の朱色が歌の中心
に色づいている印象。

三首目。「鯖の頭が青し」は、生々しく死を示している。

ビラの皺や鯖の質感をも画いた油絵を見ているような歌。

四首目。さかさに提げられている「鯖」は、家路につく教
師の屈託や倦怠を代弁しているかのようだ。

五首目。ぐつぐつと煮えている、くすんだ色の「秋菜」に、
くたびれて淀む夜の胸の内と、暗い表情が投影されている。

六首目。「復員服」の色と「飴」の色が映える時間に、
「豆」がふくらみながら、色艶良く食べ頃になろうとしてい
る。この時代の街の様子がありありと見えてくる。

この六首の中の「桃」「にんじん」「鯖」「秋菜」「豆」も、
それぞれモチーフとして、その色や形状が印象的だ。そして
それらモチーフには、作者の思いや歌の中の主人公の胸の内

が込められていたり、食物の命から感じるリアリティーと、存在の奥深さを感じる。また、歌の風景の中で何かを象徴する役割を持っているとも言えよう。

続いて、『血と麦』を鑑賞する。

馬鈴薯がくさり芽ぶける倉庫を出づ夢はか
ならず実現範囲 『血と麦』

ピーナッツをさみしき馬に食わせつついか
なる明日も貯えはせず

パン竈にふくらむパンを片隅の愛の理由と
して墮ちゆけり

牛乳を匙ですくいて飲み病めば船は遠くを
出てゆきにけり

寝台の上にやさしき沈黙と眠いレモンを置
く夜ながし

乾葡萄喉より舌へかみもどし父となりたし
あるときふいに

目の前にありて遙かなレモン一つわれも娶
らん日を恐るなり

一首目。暗い倉庫の中で「馬鈴薯」がくさりながらも芽吹いた。倉庫は夢の実現に倦む心か。芽吹きを見つけ、暗闇を出て明るい方へ向かう。

二首目。さみしき馬に「ピーナッツ」を与える、という美しく詩的な魅力ある行為。草の餌よりピーナッツは高価だ。貯えはしないし、貯える事より大切に思う事があるのだ。

三首目。熱の中でかくわしくふくらんで美味となるもの、

その傍らで、墮ちてゆく人。「パン」に漂うよい香りと生活感が、「片隅の愛の理由として墮ちゆけり」に仄かな現実感と生々しさを加えて、効果的だ。

四首目。「牛乳」という健やかな白い液体が、匙のくぼみで小さな海となり、体内に流れてくるのだが、そこに浮かぶ意識という船は、遠く私から出て行きそうである。この一首の物語を通して、発熱している時の、体がだるく、頭がぼんやりしている、あの感覚を読者は想起するだろう。

五首目。「映子を見つめる」の一首である。「眠いレモン」は、恋人か、あるいは恋そのものの隠喩だろうか。そう読んだうえでも、色鮮やかなレモンが見える。目の覚めるような酸味をも包む、とろけるような眠さを含むレモンが。「レモン」も、「寝台」も、「やさしき沈黙」も、背景の「夜ながし」も、短歌という絵の中に画かれて、とても美しい。

六首目。「父となりたしあるときふいに」の「ふいに」は「乾葡萄」が喉から舌に戻るその時。知っている乾葡萄の風味と食感を、「父となりたし」という思いに重ね、読者はこの歌の心情を知ることができる。

七首目。目の前にはつきり見えるけれども、未知の憧れを内に秘め、遙かな気配の「レモン一つ」。未来と現実、憧れや恐れを孕んで目の前にある「レモン」。想像する読者にとっても、それは心惹かれる存在だ。

この歌集においても食物は、「ピーナッツ」と馬、「牛乳」と船など、他のモチーフと呼応して、独特の詩情を生み出していたり、「乾葡萄」や「レモン」のように、思いで満ちた、

とても豊かな存在感を発していたりする。寺山の歌の中で、モチーフとしての食物は、その独自の詩情をリアルに直感的に読者の心に伝える、要の役割を担っているのだ。

ところで、『血と麦』の末尾に収められている「私のノート」にはこのような記述がある。

今日までの私は大変「反生活的」であったと思う。そしてそれはそれでよかったと思う。 『血と麦』

「反生活的」な作者が、生活に直結する食物の歌を多く詠んでいるのはなぜか。それは、食物を、おおかた歌の表現の効果的なモチーフとして見ているからなのだ。食物に対するそういった認識はどのようにして生じたのだろう。そこで、寺山修司の原点に意識を向けてみる。

寺山修司は青森県で生まれ育った。寺山は、その青森の生活の中から、表現者となるための鍵を見つけた。例えばそれは、林檎園にあった。生活の近くのありふれた場所でありながら、林檎園はそこだけ異世界のように、林檎の木と、そこに実る林檎は芸術的だ。木に実る赤い林檎たちは、青空を背景に、モチーフとして鮮やかに視界に飛び込み、記憶を去らない。その林檎園に寺山は、全く生活的ではない、つまり「反生活的」なものを見たのではないだろうか。ただ、誰の目にも美しい林檎園を、どこまで芸術として捉えるか、どこまで心に留め置くかは、その人の資質による。寺山修司には、林檎園を見る時、あるいは思い出す時に、強い感受性によって湧き出る独自の詩情があった。それを鍵にして開かれた、「反生活的」な、〈現実の青森ではない世界〉の林檎園で、

心の中に、言葉を使った絵を画くことを謳歌していたのだ。林檎園はこのように詠まれている。

わが通る果樹園の小屋いつも暗く父と呼び
たき番人が棲む 『初期歌篇』

果樹園のなかに明日あり木柵に胸いたきま
で押しつけて画く

チエホフ祭のピラのはられし林檎の木かす
かに揺るる汽車過ぐるたび 『空には本』

齡よわきて聚るにあらず林檎の木しずかにおの
が言葉を燃やす 『血と麦』

「果樹園」は林檎園であろう。寺山の内なる林檎園には、「父」や「明日」や「チエホフ祭のピラ」のある風景が見え、擬人化した「林檎の木」の言葉が見えている。「林檎の木」と表現されたそこに、実る果実を想像するが、寺山は食べるための林檎ではなく、表現したい風景の、モチーフとしての林檎を見ていたにちがいない。同様に、「レモン」や「鯖」や「玉葱」は、〈自分の感受性を通して見た世界の物〉であり、〈読者に見せる作品のモチーフ〉であったのだ。

若き日の寺山が心に画いた絵は、自ずから三十一文字という額縁を選んだ。定型が持つ力を信じて、絵を画くような客観的で深遠な視線で表現された歌は、私たち読者を楽しませてくれる。ありふれた生活の、身近にある物や風景に芸術を見つけ、それを喜び、歌の調べの中で伸びやかに表現されたその作品は、今もみずみずしさを失っていない。